

(様式 5)

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立魚津高等学校・教諭・中嶋美奈子
- 2 研修期間 令和5年8月29日(火)～令和5年9月6日(水) 9日間
- 3 調査研究課題 ヨーロッパ諸国の教育事情視察による生徒の可能性を最大限に引き出す教育の在り方についての調査研究
- 4 研修機関等
デンマーク：ホイデバングェンス学校、ガメルヘレロップ高校、
在デンマーク日本国大使館
ドイツ：ミュンヘン市教育・スポーツ局、在ミュンヘン日本国総領事館、
オストヴェルデンベルク商工会議所アーレントレーニングセンター、
Zeiss 社
オーストリア：ザルツブルク市内視察

5 研修の概要

(1) ホイデバングェンス学校 (デンマーク)

まずは、Tobias Malmgren 校長先生から学校概況について教えていただいた。7～9年生が在籍する日本の中学校に相当する学校である。今年度は新入生 254 名 (10 クラス) が入学し、1 クラスあたりの生徒数は最高で 28 名である。教員は 102 名いる。1 クラスあたりの生徒数が 35 名～40 名である日本と比較すると、デンマークは一人一人の生徒の力を教員が把握しやすく、個に応じた指導の充実につながるのではないかと考えた。保護者とインターネットでつながっており、日頃の学校生活のよかったことやチャレンジすべきことを積極的に配信し、保護者との対話を大切にしている。学校と保護者との連携が十分にとれていることが生徒のよりよい指導に活かせると考え、参考になった。デンマークの教育は「生徒に優しすぎる。もっと勉強させてもよい。」とよく言われるが、生徒にプレッシャーを与えすぎることにはよくないと考えている教員が多い。しかし、以前は宿題を出していなかったが、最近は高校進学後の学習を見越して宿題を出すようになっており、生徒の現状に合わせて柔軟に対応している。

次に、ロシア、中国、ウクライナなどの多くの国から集まった生徒がいるクラスの様子を見学した。生徒に学校生活について質問すると積極的に手が挙がり、「自分たちを大切にしてくれる」「生徒の希望をよく聞いてくれる」「放課後のクラブが充実している」などと前向きな返答が多く、学校に対する生徒の満足度の高さが伝わってきた。日本の生徒からはどのような答えが返ってくるだろうと考えながら、今の日本の子供たちに必要なことは何かを見つけていきたいと思った。

(2) ガメルヘレロップ高校 (デンマーク)

まずは、英語の授業見学をした。英語を使って社会 (歴史・産業) について教える授業であった。高校教員は主科目と副科目の 2 科目の教員免許をとる必要があり、今回の授業担当のシャロット先生は英語と体育の担当の先生であった。大きなスクリーンに映し出された本の内容について、生徒が自分のパソコンで調べたり、友達と話し合ったりしながら、主体的に学ぶ姿勢が印象的であった。

次に、Bjarne Edelskov 校長先生と Janni la Cour 副校長先生から学校概況について教えていただいた。1894 年創設の生徒数約 1,000 人の大規模校であり、ほとんどの生徒が大学に進学する。学校目標として「学術的」「仲間」「多様性」を掲げている。全ての科目が A、B、C にレベル分けした授業の中から選択する習熟度別学習である。日本と同様に、SDGs を意識して全ての科目の中に「環境」を取り入れている。学校の清掃は業者が担当し、清掃の時間が校時に設定されている日本とは異なる。教員は「年間 1,680 時間」と勤務時間が定められている中で、自由に毎日の勤務時間を設定できる。家で働いても学校で働いてもよい。1 週間あたり 25 時間しか働かない週もあれば 60 時間働く週もある。残業はなく、5 週間の有給休暇を取得できる。日本の教員の勤務実態との違いに驚き、働き方改革が進み始めている日本でも参考にできる部分があると感じた。

最後に校舎見学をした。コペンヒルを設計したビヤンケ・インゲルス (ガメルヘレロップ高校卒業生) のグループによる先進的なデザインの体育館を見学した。美しいカーブの屋根に特長があった。また、屋上にも芝生やバスケットコートがあり、開放的な雰囲気が印象的だった。

(3) 在デンマーク日本国大使館（デンマーク）

宇山秀樹大使からデンマークのよい点を教えていただいた。デンマーク人は英語を流暢に話せること、1人あたりのGDPが高いこと、風力発電を通して脱炭素化の取り組みが進んでいること、高負担高福祉国家であり幸福度調査が上位であることなどが挙げられ、日本との違いを理解した。

原田優公使参事官から政治や外交、経済、社会保障、気候変動対策、福祉について説明をしていただいた。デジタル化が進んでいるため、コミュニケーションがSNSに頼っている現状を知り、日本と同様の課題を抱えていると感じた。デンマークでは救急車を呼んでもなかなか来ないという現状を聞いて、日本の医療のありがたさを実感した。

(4) ミュンヘン市教育・スポーツ局（ドイツ）

Kathrin Schmidtさんにドイツの職業訓練教育について教えていただいた。ドイツでは10歳（小学4年生）で進学するか職業訓練を受けるか将来の選択をする。15歳まで義務教育を受ける日本と大きく異なり、早期から「手に職をつける」教育が可能である。職業学校に通いながら企業で職業訓練を受けるデュアルシステムについては、事前研修時から興味をもっていたが、このシステムには課題もあり、運用していくためには専門家不足を解消する必要があるようだ。特に介護職、パン屋、肉屋で専門家が不足している。職業学校の多様性を理解することができ、ドイツと日本でシステムは違うが「職業人を育てたい」という意識は共通しているものがあると感じた。

(5) オストヴェルデンベルク商工会議所アーレントレーニングセンター（ドイツ）

労働者を訓練する施設として、2017年12月に開設された。金属及び電気分野でのデュアルトレーニングから最高レベルの技術訓練まで多岐にわたる訓練を実施している。

まずは、センター長のOliver Kosikさんから商工会議所やマイスター制度について教えていただいた。商工会議所は28,000の企業や会社が参加している。各企業が雇用した新人を、今回訪問したトレーニングセンターに派遣し、トレーニングを積ませる。コロナで数年は入所者が減っていたが、今年度は79名と例年通りの人数に戻った。マイスターになるためには、最短で4年半勉強し、マイスター試験（実技試験・筆記試験）を受ける必要がある。マイスターは現場の責任者として、組織の責任を負い、若い人のスクリーニングの役割もある。

次に、トレーニングセンターを見学した。紙の使用を少なくするためにパソコン使用を推奨している点は日本と似ていた。多くの企業で必要とされている3Dプリンターの使い方を学ぶ設備を見て、高い技術力を持った人材を育てる環境が整っていると感じた。



(6) Zeiss社（ドイツ）

光学およびオプトエレクトロニクス分野で世界的に事業を展開する先端企業である。半導体の世界シェアの80%がZeiss社である。職業訓練システムについての説明を受け、トレーニングセンターを見学することで、デュアルシステムに関する理解を深めた。優秀な人材を育てて後継者を確保するために今までの方法にとらわれずに新しい方法を積極的に取り入れたり、ドイツのシーエンスの機械でトレーニングをすることで応用力を高めたりするなど工夫がされていることが分かった。

(7) 研修を終えて

今回の研修は「自分が狭い世界で過ごしている」と気づかされる貴重な9日間であった。ヨーロッパの教育、文化、歴史、自然環境に触れることで私の知らない世界が広がっていることに驚き、毎日が発見の連続だった。ヨーロッパの学校や企業を見学することで、ヨーロッパの良さを理解すると同時に、日本の良さを再認識することができた。生徒の主体性や可能性を活かす教育や、教員の残業がない働き方について詳しく知ることができ、日本の教育の改善点について、すぐに答えを出すことは難しいが、今後深く考えていきたいと思えるきっかけとなった。このような貴重な機会を与えてくださった富山県教育委員会の皆様、富山経済同友会の皆様に深く感謝申し上げたい。